

司会 先ほど、お話された福井県文書館のデータとかも入っているということなんですか？

加納 そうです。データというか、まさにデジタルアーカイブ福井に入っている、幾つかの資料が、「みんなで翻刻」に登録されて翻刻が進んでいるということです。

司会 すごいですね。それを、福井県文書館が、また、それを使って何かできる。

加納 そうですね。先ほど、長野さんからお話があったように、デジタルアーカイブ福井はデータの方も充実しているので、資料自体だけではなくて、例えば、家臣、福井藩の名簿を編集とかして、そういうところにも貢献していけたらいいなと思います。



みんなで翻刻「デジタルアーカイブ福井の資料を翻刻」のプロジェクトページ

【事例発表 4】

「地域の人たちと作るウィキペディアと地域の情報」

Miya. m

(ウィキペディアン)

Miya. m です。ウィキペディアをずっと書いています。私の話は、「地域の人たちと作るウィキペディアと地域の情報」です。ウィキペディアには、17年前から Miya. m の名前で参加しています。7年前から「ウィキペディアタウン」というイベントに参加して、各地の地域の情報をウィキペディアに書き込むお手伝いをしています。

今日のお話ですが、最初に、ウィキペディアはオープンデータですよということを説明します。その次に、ウィキペディアタウンって何？ その次に、ウィキペディアタウンのイベントで作成された記事のなかで印象に残った項目について幾つかご紹介します。最後に、ウィキペディアタウンに飽き足らず、継続的に地域の情報を調べて残していこうとしている活動

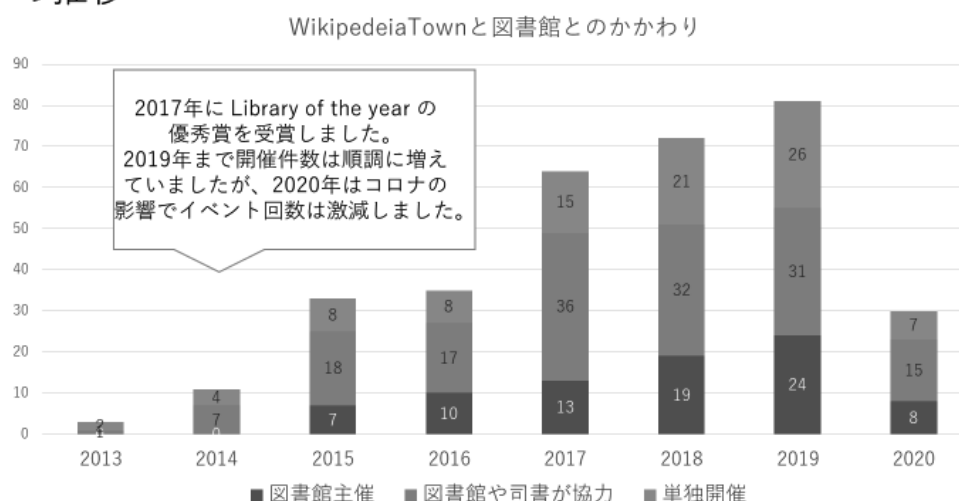
について、私の地元の「いたみアーカイ部」の例をご紹介します。

ウィキペディアのルールは、2001年の設立当初からオープンデータの考えに則っております。ウィキペディアを地域情報発信に使う利点ですが、ウィキペディアはインターネット上で有名なサイトで、いつでも誰でも無料で情報を上げることができます。運営するウィキメディア財団は、書き込まれた情報を「未来永劫維持する」と言っています。お気に入りだったインターネットのサイトが、何年か経ったらなくなっていたということが間々ありますが、ウィキペディアはそういうことをしないと断言しております。「ウィキペディアタウン」という言葉自体は海外から始まったもので、直訳すると「ウィキペディアの街」です。街のいろいろなことをウィキペディアの記事として書き込んで、街の各所にQRコードなどを設置して、記事を読めるようにした街という考え方です。

日本でも、この形に近づいているところがありまして、下は京都府京丹後市の例です。丹後地域は、現在、現場にQRコードを貼るだけではなく、インターネット上に「たんご百科事典」というサイトをつくっていて、そこからウィキペディアの各記事に飛べるようにされています。

われわれがいつもやっておりますウィキペディアタウンは、日本的な解釈でして、日本でのウィキペディアタウンはイベントのことです。2013年から始まっております。イベントの回数は、増えてきています。2019年まで順調に増えていたのですが、去年はコロナの影響で、こういう人が集まるイベントは自粛ということで、かなり減っております。

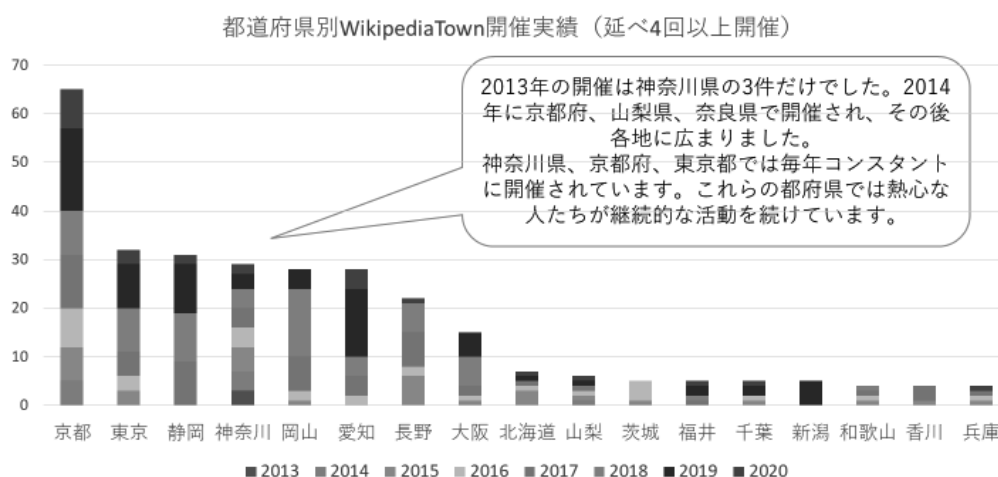
「ウィキペディアタウン」 日本でのイベント開催件数の推移



こちらは都道府県別に見たものです。2013年に神奈川県で3件始まりました。その翌年に、京都・山梨・奈良で開催されております。神奈川・東京・京都の3都府県については、

毎年コンスタントに開催されていて、これらの都府県では、熱心な人が継続的に活動が続けていることが分かります。

「ウィキペディアタウン」 日本でのイベント開催場所の状況



この図は、私が実際にウィキペディアタウンに参加した街を示しております。今まで、西日本で100回くらい参加しています。今回の講師の方々のところにも、何回かお邪魔しています。

今日は、京都府の京都市・宇治市・精華町、それから京都府北部の京丹後市、最初のスライドにも使いましたが、岡山県の真庭市、最後に兵庫県の伊丹市でのことについてお話いたします。

「ウィキペディアタウン」で作成された地域記事

いごもり祭（京都府精華町）

「いごもり祭」という記事です。これは2015年に、京都府の国立国会図書館の関西館で行ったイベントのときにつくった記事です。とても古い祭で、祭の内容は、正月の3日間、精進潔斎して物音も立てないように生活しながら祭の行事を執り行うものです。「今どき、こんなことをやっているの」と、当日、参加された方に伺ったのですが、「いや、本当に、今でもこのようにやっていますよ」と教えていただきました。

勝山町並み保存地区（岡山県真庭市）

ウィキペディアタウンというのは、まちおこし活動の一環として開催されることがありますが、その代表例です。主催者が岡山県の勝山振興局地域振興課で、ここは、まちおこしの目的で古い街並みを再整備して、きれいに作っております。

左側は、11月に行われる「勝山喧嘩だんじり」の写真、2台のだんじりが街のなかでぶつかり合う祭です。なかなかこういう写真は、われわれがふらっと行っても撮れないですが、現地の人がいい写真を持っておられました。

右側は、勝山にあったお城の御殿の天井を飾っていた飾り天井です。今は、どういうわけか民家の天井にあって、このイベントにたまたま参加してくれた人がそこに住んでいて、「じゃあ、私の家の天井の写真をウィキペディアに挙げてあげよう」ということで、嘘のような本当のお話でした。

こまねこまつり（京都府京丹後市）

次にご紹介するのは、「こまねこまつり」というものです。先ほどの「いごもり祭」は、いつ頃か行われていたか分からない古くからの祭ですが、こちらは、2016年から始まった祭の項目です。

京丹後市の峰山にある「狛犬」ならぬ「こまねこ」に因んだ祭ですが、実は、2016年に第1回開催で、第2回目の2017年は台風で中止、3回目の2018年の開催に合わせてこのイベントをやった。それだけ話を聞いたら、「そんな祭、百科事典に載せるほどのもんかいな」という気がします。2009年から行っているまちおこし活動の一環として、この祭を設定したとか、あるいは、多彩な協賛行事についても詳細に記述されております。現在、ウィキペディアの記事のなかでも、優れた記事として認められる「良記事」という段階に認められております。

これが、実際のこまねこ様です。高さ30cm~40cmぐらいのかわいらしい像です。なぜ、ここに「こまねこ」がいるかという、丹後地区では、昔からお蚕様の養蚕が盛んでした。このお蚕を食害するネズミを駆除するありがたい存在としてネコがいるということで、ネコをお祀りしたそうです。

幽霊子育飴（京都市）

これは京都女子大学の学生向けのイベントで作成されたものです。「幽霊子育飴」（ゆうれいこそだてあめ）。学校の近くに飴のお店があります。400年ほど前に、臨月で亡くなって埋葬された女性が、墓のなかで生まれてしまった赤ちゃんを育てようとして、死んだ女性が幽霊になって飴屋さんに飴を買いに行っていたという話をもとに代々続いている飴の記事です。特筆性ということには、ちょっと問題があるかと思いますが、検証可能性・特筆性ともに、いろいろ調べて担保するような形で報告を作っています。

実際に売っている飴とお店です。この左側の飴は、昔ながらの固形のを適当な大きさに割ったものです。右側が、それを売っているお店の写真です。実は、飴単体の記事がウィキペディアにありまして、鹿児島の名物の「ボンタンアメ」です。

通圓（京都府宇治市）

「えっ、まだなかったの」という記事です。「通圓（つうえん）」。宇治川の橋のたもとにある古いお茶の店です。平安時代末期の1160年創業で、一休和尚とか、千利休とか、日本史上の有名な方の名前がどんどん出てくるような由緒あるお店で、狂言の題材にもなっているそうです。

後で気が付いたのですがウィキペディアの「通圓」という項目は、日本語版より先に英語版にできていました。

いたみアーカイ部

ウィキペディアタウンは1日のイベントです。長くても2日間のイベントですが、伊丹地区では、1日～2日でやるのは何か物足りないという話があって、単発のイベントになりがちな点、パソコンに不慣れな人でも楽しく続けられるような活動をしたという事で、われわれは、「いたみアーカイ部」を2017年の末に立ち上げました。

毎月1回、図書館に集まり、1時間ぐらいの打ち合わせをします。一つのテーマについてはのんびり数カ月かけています。活動としては、テーマを決めて現地を歩いて調査し、役割を決めて分担して調べたことを持ち寄り、一つの項目を作っていきます。会場の「ことば蔵」はこれらの活動をバックアップしてくれています。

いたみアーカイ部の成果ですが、最初の年は「酒造り唄」のオープンデータ化に取り組みました。伊丹市は、江戸時代から酒造りが盛んで、酒造りの唄というのも過去には歌われていたのですが、この音源があったので、それから歌の歌詞をオープンデータ化いたしました。

その次に、伊丹市に江戸時代からある灌漑用水路「昆陽井（こやゆ）」と「加茂井（かもゆ）」を作りました。左側が「昆陽井」で、今でも現役の水路で、流量も多いです。右側は「加茂井」ですが、この写真の場所より下が完全に都市化してしまい、ここから先は、あまり水路として活用されておられません。

灌漑用水というのは、昔から水の取り合い（水争い）が付きものだったということで、そういうものが伊丹市にもたくさん残っております。左側が水路の水門に設けられたものです。石造りで頑丈に作っています。

真ん中が、水路の分けるところに設置された大きな石。大きな石を置くと動かさないで、自分のところへ水をたくさん取ろうとか、ごまかしができなくなるということで、こういうものを置いたそうです。

右側は、小さな石の塔ですが、これはもっと悲しい話がありまして、ここの水路は水があるけれども、周りの田んぼへ水が行かなくて、水がなかったお百姓の方が、その水路から水を盗んだ。それが見つかって打ち首になった。その方を祀った首塚がこの写真です。

いたみアーカイ部は、紙ベースの報告も行っております。図書館が主催する「図書館を使った調べる学習コンクール」に参加して、「防災マップを検証する」「明治初期の伊丹市域の

小学校の変遷「加茂井」の3点を報告しております。紙の報告は、伊丹市立図書館でいつでも閲覧できる形で展示されています。

「防災マップを検証する」というのは、昭和30年代の伊丹の小字レベルの地名を、現在のハザードマップと比較して検討しました。「流田（ながれた）」などは、水害を受けそうな地名ですね。

司会 「地元の祭の伝承、神話とか、そういったものは、疑似科学が拡散する懸念を持ちました」ということですが、「そういったものに対して、何か対応のマニュアルみたいなものはありますか」というご質問です。

Miya ウィキペディアの基本として、伝承、言葉だけのものでは書けないんですね。どこかの本に書いてある、書籍に書いてある、その書籍の記述をもとに書くということで、言ってみれば責任逃れをしているというか。この場合でも、京都の文書をいろいろと引っ張ってきて、その中に書いてあるところから載せる。

司会 「いたみアーカイブ部の活動は素晴らしいですね」と書いてくださっている方もいらっしゃいますね。「課題は持続性なのですが、それを補完しているような活動ですね」というようなご意見もありました。

Miya 毎月1回集まるというのがやっぱり継続には重要ななと思います。

【質疑応答・ディスカッション】

樫村 今年、私の「社会調査実習」の授業はオープンデータをテーマに行っています。それで豊橋市の職員にオープンデータについて質問すると、今日の世界と全く違ってすごく硬いです（笑）。豊橋市もたくさんオープンデータって作っているんですよ。豊橋はそれをカテゴリー化していて「まちづくりみたいなカテゴリーがあるのがうちの特徴ですよ」と自慢されるんですけど、使いづらいというか。市民協働の観点が弱い。

内浦 樫村先生がご指摘されるように、地域のなかで、知識とか、スペックとか、価値観に差が出てきちゃって、こういうシンポジウムに出られるとか、聞きたいという方たちは、どんどんスキルというか、知識も豊かになっていくんですけども、一方で、岡本さんが「文化資源」という言い方をされていましたが、図書館的に言ったら「郷土資料」とか、そういう資源をお持ちのご高齢の方たちの経験則上のものとか、頭のなかにあるものを、オープンデータに掘り起こすことが、たぶん、一番、今、現場での課題なんですよ。「さあ、話してください」と言って、すぐ出るものでもないし……。

だから、その地域資源・文化資源を持っている、郷土資料的な財産的な地域のご高齢の方たちから、そういうデータをどう吸い上げていって、共有財産にしていくかという、そこも含めて、今後、課題に挙げてもらって、みんなで、いいお知恵を出してもらって共有できると、すごくありがたいなと思いました。